京鹿子

昭和二十三年九月二日第三種郵便物認可
平成十八年十一月一日発行
通巻[illegible]九五号（毎月一回一日発行）

11月号

近詠

桐は実に

丸山佳子

線香は日本のかをり盆終る

お地蔵の賽をしらべに小鳥来て

音の無い川を見下ろし名のみ秋

秋扇ゆかりと言へば小指ほど

PDF= 俳誌の salon

きかん気の草が木になる花蓬

秋暑し大儀に下ろす踏切り棒

色鳥に仁王の御目よそよそし

桐は実に音沙汰ないを良しとせむ

食み喋り舌一枚で秋思消ゆ

この冬はころばぬやうに南無そはか

豊田都峰

清響集　その六十七

たたなづく鉾杉の嶺々涼風充つ

手のなりに風をしづめのをどりなる

紫蘇の花里山まるく日をおとす

夕蝉や石仏もまたうすれゆく

秋声をひとつこぼして葉のさゆれ

山霧に置き去りにする影法師

あまさずに湖国を入れて秋天下

PDF= 俳誌の salon

一望の座は秋麗の遠伊吹

秋分やや半々は半分でなし

待宵やひとつの草になりてより

藤袴高さは器量の風見知り

地平まで帰燕の空の昨日今日

「俳句十二月号」入門特集　掲載

「俳句朝日十二月号」わが結社　掲載

「俳句あるふあ十二・一月号」今日の俳句十句　出稿

「俳句あるふあ増刊号」現代俳句の三百人　出稿

PDF= 俳誌の salon

秀華採集

河鹿笛耳の奥まで蒼くなる　　　谷口文子

美声を発する雄の河鹿。それを聞いている状態がたいへん詩的に描写されている。

落し文ふいに目隠しされそうで　　　佐々木紗知
葛の蔓ゆくへ探しの七曲り　　　川村瑠璃

前句の落し文への関心、落とした側への思い入れによるひとつのドラマの具体的な表現と頂く。後句の、探す心の具体的な表現もすばらしい。突き詰めて具体的に表現するのが、俳句。

PDF= 俳誌の salon

鈴鹿　仁

月うさぎ

兀然の一言のずれ露冴ゆる
月うさぎ雲と遨ばむをどり町
夕雲は迅し人恋ふ風の盆
紫蘇の実や糸口の糸解れしも

萩まつり三句

萩蝶に小花の魅せし彩が好し
人の意とせず宮萩の露こぼす
萩に蝶かけがへのなき宮の風

近詠

宇都宮滴水

冬ひばり

十月や記憶の中のをんな坂
行間の乱るが侭に虫すだく
曇天に鮭の産卵まだつづく
穴まどひ顔貌とくに変らざり
心不全夜長の灯し暗すぎて
天高し綽名で記す伝言板
枯すすき聴えさうなる人の声
冬ひばりむかしを残す流れ橋

PDF= 俳誌の salon

神麓集

今朝の秋　藤岡紫水

竹林の風笛となる星月夜
足許の径に風あり今朝の秋
火点せば風の流れて地蔵盆
二タ夜さの雨に洗はれ銀河濃し
振り向けば恥じらふ風の酔芙蓉

角直指

山国川源流の星合歓万朶
鎖渡し難所のむかし洞の梅雨
巌通す一念の鑿跡の梅雨
享禄の世よりの洞の梅雨昏し
深耶馬は温泉のふるさと河鹿鳴く

和語　爾寝瓶史

陶枕に馴れぬ夢にて躓けり
面映ゆく青鷺光る魚逸らす
パン屑の記憶辿りて小鳥来る
酸漿の星の嚆矢に開きゐる
和語もちて虫声訳す異国僧

吉田多美

バス停に無人賣あり蟬はやす
酔芙蓉この縁談はまとまらぬ
反りて乗る焼鮎の目まだ碧し
夕立に雲水経列みだれざり
病む女と昔語りの団扇風
夕立にわだかまり解け一つ傘

丹生をだまき

熟れトマトすぱつと切りたし包丁研ぐ
遠雷や空気がどんどん重くなる
向日葵図苦悩にねぢれし筆の跡
昼寝覚しばらく続く浮遊感
朝露の飾る蜘蛛の巣佛はずに

山田をがたま

汗知らず快適にして病の身
炎暑来る夫と娘のゐて恵みの刻
病室の広さしみじみ昼寝覚め
病院食に西瓜一と切れ色を添ふ
再入院約し炎暑の中帰宅

PDF= 俳誌の salon

神麓集

奥村鷹尾

梅雨晴の一と日無料のバスを待つ
斑鳩の一塔雷禍に續く悲話
隣家の猫居付きて庭の水飲みに
音合せの如き細音の朝ちちろ
鉾渡御の囃子は欄に腰預け

岩崎憲二

汗陰陽働く汗に恥ずも汗
目から火を顔から鱗落とす汗
盆近し弘子の名乗り耳朶に棲む
寿子逝く秋の悲しき夢のなか
李枝子逝く汗ふくさまに涙ふく

荻野千枝

海くらげ増え過ぎ気骨など知らず
梅雨寒し整形外科の荒道具
水色のアロマキャンドル光(か)ゲ涼し
音触れてグラスを洗ふレース越し
白昼や水に火照りし青睡蓮

星月夜

柴田朱美

地続きの寺しんかんと星月夜
土の橋木の橋渡る星月夜
星月夜篳篥の位置を変へてみる
稜線に潜む荒武者星月夜
星月夜道より低き屋並あり

松田都青

皮剝いて桃の秘密を解き放す
まつさらな闇にランプの点く晩夏
変身に疲れし魔女の夏休み
空蟬の落ちし数だけ夢消えぬ
晩学の出発点は花野とす

舩越美喜

脇役といふもの大事キヤベツ剝く
夏寒し一寸先の落し穴
貝風鈴音色こぼるゝ黄昏どき
薄雪草放牧の原果見えず
水中花大きい声をおさへをり

PDF= 俳誌の salon

京鹿子集

豊田都峰選

高槻　谷口　文子

曇り後雨の危ふさ星祭
羽化の夏花嫁衣裳の白づくめ
河鹿笛耳の奥まで蒼くなる
梅雨明けや介護かさねる老夫婦
水平は池の寧らぎ枝蛙

千葉　佐々木紗知

朝顔が朝顔を生みつづけをり
雨上るいろめきたちし青トマト
晩年は鍵一つ持ち遠花火
落し文ふいに目隠しされそうで
明るさも闇の深さに合歓の花

枚方　川村　瑠璃

朝は蝉昼は鴉に夢破る
海水浴泣きし伜今は子に厳し
葛の蔓ゆくへ探しの七曲り
梅漬けて母の健在メールする
半夏生化粧覚へし十七才

所沢　牧野　麦芽

雲涼し朝明の堤老詩人
湯あがりの酒も又よき端居かな
独り住み訪ふ人もなし氷菓食ぶ
妻の忌や仏間に遠く祭り笛
曇天に花火があがる仏の日

PDF= 俳誌の salon